平成十六年度　上代文学関係卒業論文要旨・修士論文題目

（五十音順）

卒業論文要旨

万葉歌の耽美表現

——平十八年の雪歌群と家持歌——

安藤　公美

『万葉集』の巻十七～巻二十は家持の歌日記といわれている。その末四巻の実質的冒頭に、天平十八年正月の雪の日の肆宴歌群が置かれている。元正天皇の御在所で催された即興の肆宴での応詔肆宴歌群である。前年の天平十七年正月に従五位下に昇った家持にとって、この肆宴に列席したことが後の肆宴歌に多大な影響を与えていると言えるであろう。そこで、天平十八年正月の応詔肆宴歌群の家持歌を中心に、家持の残した多くの雪歌の諸相を確認検証し、家持が応詔肆宴歌群をどのような作品にしたかを考察した。

従来、天皇讃歌であると解釈されてきた家持歌だが、末四巻中の家持の雪歌を見てみると、その意味を持つだけでなく、基本形の讃歌に加え、「雪」を景として詠んでいると考えることが出来た。それは、景を詠むことによって、上皇讃美を果たしているとも言えるのである。そして、家持の雪の歌世界には越中守時代の雪歌のように宴の雅な世界があり、「雪」を特別な歌材として扱っている。そのような歌を後に詠むことが出来たということは、天平十八年正月の時点で既に家持の中に独自の雪世界が存在し、その資質を持つ歌人であったとすることが出来る。

さらに家持は中国文学を教養として取り入れ、それらを融合し、「賀」という世界だけでなく「雅」という世界を「白雪」という語に含め、与えられた「雪」というテーマの中で、新しい讃歌を作り出したと考えられる。

そして家持は、題詞・左注を付け、歌群という形にし、末四巻中の雪歌の先駆をなす作品としたと考えた。

萬葉集の贈答歌

——桜井王と聖武天皇を中心に——

井口　純子

『萬葉集』巻八の秋相聞の部に桜井王と聖武天皇との贈答歌が収められている。二人は天武天皇を曽祖父に持つ、またいとこの関係であるが、このような親しげな贈答が出来たのは何故なのか、どうしてこのような贈答歌が残されているのだろうか、はっきりしていないことが多い。本稿ではこの二首を当該歌とし、それぞれの和歌の技巧を読み取った上で、天皇と王の関係や立場、この贈答にどのような思いを込めていたのかについて、集中の他の贈答歌とも見比べながら、検証した。

結論として、桜井王と聖武天皇の贈答歌は、同性同士で詠まれた相聞歌であるが、ただの相聞歌としてとらえるのではなく、桜井王の贈歌を受けて聖武天皇が反発性を持つ歌を歌うことで両者の親密度を表すだけでなく、天皇と王とのやり取りによって場を和やかにしたと考えた。本稿ではそのやり取りの場は集中のほかの用例から考えるに宴の場ではないかと推察した。このように新しい相聞歌や贈答歌の形が、ただ歌を贈り交わすよりももっと幅広く、発展させた形になっていったことがうかがえる。

桜井王は聖武天皇に本当に近しい人達のうちの一人であり、それは贈答歌のやりとりなどから十分うかがえることである。桜井王の集中に残る歌が二首とも聖武天皇と深く関わり合いがあるのは、おそらく風流侍従として聖武天皇の傍についていたことも含めて関係があったものとして考察した。

柿本人麻呂研究

――羈旅における「神」――

岡本　英理

宮廷歌人である柿本人麻呂は、行幸歌や挽歌などを天皇に近い場所で歌うことが多い。そしてその歌からは、天皇や皇子を非常に大きな存在と感じていたことがうかがわれる。

本論は人麻呂の巻三にある筑紫下向歌を当該歌とし、同じ巻三にあり、同じ瀬戸内海で歌われた羈旅八首とを比較しつつ、当該歌で歌われる「神代」とはどういったものであるか。また、当該歌と羈旅八首はどのような関係にあるかについて考察した。

当該歌で歌われる「大和島根」は天皇の治める場所であり、「遠の朝廷」も天皇の治めている大和の国の離れたお役所であり、と、人麻呂は全てにおいて天皇を意識した表現を使っている。ここから、当該歌は筑紫への旅で歌った羈旅歌であり、行幸歌ではないが、羈旅歌の形を取って、天皇讃美を歌ったものであると考えた。当該歌と羈旅八首は同じ羈旅歌ではあるが、羈旅八首では土地誉めと家や妹への思慕の双方を歌い、当該歌は土地誉めも果たしているが、歌う対象は「神代」であり、使われる表現も吉野讃歌に見られるような天皇讃美である。当該歌で人麻呂は自身が使えている持統天皇の代を「神代」とした。当該歌のように天皇のいない旅で、なおかつ、都から遠く離れた筑紫への旅の中での天皇讃美をした歌は特殊である。本論では当該歌は、人麻呂が〝旅の中で歌う天皇讃美の歌〟を生み出したものであると結論した。

後期万葉における皇族歌研究

――サロンの形成――

小川　範晃

後期万葉には数多くの皇族たちが歌を残しており、その中でも贈答歌や宴席歌を数多く詠んでいる。

本論では、後期万葉を奈良遷都から天平五年までを第三期、天平五年から天平宝字三年正月までを第四期とし、皇族たちがどのような人たちとサロンを形成していたのかを見るため、第三期、第四期の皇族の名を挙げ、巻別、年代別、歌人別などに分類した。本論では特に、女王、橘氏、大伴家持に注目し、皇族との関係を考察した。

結論として、女王たちは贈答歌を多く詠んでおり、その中でも大伴氏に対して贈答歌を多く詠んでいた。宴席で歌を詠んでいるのは、久米女王と河内女王、粟田女王だけであった。